

杏林医学会 第33回例会 開催報告  
「不便の心地良さ ～途上国小児医療の関わりから～」  
(演者：赤尾 和美氏)

医学部感染症学教室寄生虫学部門

小 林 富美恵

2017年11月30日に基礎棟3階会議室において第33回杏林医学会例会が開催された。本例会では、講師として特定非営利活動法人 フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN 代表の赤尾 和美 氏をお招きし、「不便の心地良さ～途上国小児医療の関わりから～」というタイトルで講演して戴いた。

赤尾氏は、長年に渡りカンボジアやラオスなど保健システムが脆弱な地域において、新たな医療の形作りに取り組んできた。カンボジアではアンコール小児病院の開院の際（1999年）に診療スタッフの教育・技術指導者として携わり、ラオスでは政府と交渉してラオ・フレンズ小児病院の開院（2015年）を実現させた。両国において栄養失調やエイズ感染者の訪問看護プログラムを開始し、現在も現地スタッフの人材育成をしながら訪問看護を続けている。これらの活動に対して、2017年度 第45回医療功労賞中央表彰（海外部門）が赤尾氏に授与された。

赤尾氏は杏林大学医学部附属看護専門学校のご出身である。本例会に先んじて11月24日から26日にかけて東京大学を会場として開催されたグローバルヘルス合同大会2017（第58回日本熱帯医学会・第32回日本国際保健医療学会・第21回日本渡航医学会の合同大会）で、筆者が企画した「グローバルヘルス：日本の女性・若手が世界で活躍するために」と題したシンポジウムのkeynote speakerとしてお招きし、その後も日本に滞在され、看護専門学校

にて特別講義をされるご予定であると伺ったことから、本例会での講演が実現した。

赤尾氏は「長年途上国での医療活動に関わり、異文化の中から『異医療』の存在を実感する」との思いを訴えられた。例会では、さらに、現地スタッフを教える立場である外国人として現地に根付くものを伝えるにはどうしたら良いのか、人として必要なことは何かなどの課題が示された。途上国でのこれまでのご経験に加え、実際の症例も取り上げながらの赤尾氏の熱弁に、参加した聴衆は最後まで引き込まれた。

(写真：赤尾和美氏 於：東京大学)

